



Title	月刊DRF 第78号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Issue Date	2016-07-01
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/73646">http://hdl.handle.net/2115/73646</a>
Type	periodical
Note	事務局: 北海道大学附属図書館; <a href="http://drf.lib.hokudai.ac.jp/">http://drf.lib.hokudai.ac.jp/</a> で公開したもの
File Information	DRFmonthly_78.pdf



[Instructions for use](#)



# 月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第78号 【特集】平成28年度第1回学術情報基盤オープンフォーラム

No.78 July, 2016 【連載】今そこにあるオープンアクセス 第19回

## 特集 平成28年度第1回学術情報基盤オープンフォーラム

平成28年5月25日（水）～27日（金）、国立情報学研究所の「学術情報基盤オープンフォーラム2016」が学術総合センターで開催されました。本誌では、5月26日（木）のリポジトリトラックの様子をレポートします。なお、資料は国立情報学研究所のWebサイト (<http://www.nii.ac.jp/csi/openforum2016/index.html>) にて公開されています。



5月26日（木） 10:00-12:00

### オープンサイエンス推進と大学図書館～機関リポジトリ推進委員会の取組み～

はじめに、尾城孝一氏（東京大学）より、政策によってオープンサイエンス推進が提唱され大学図書館にもそのための貢献が期待されている国内の現況および、その実現に向けた取組みを担う機関リポジトリ推進委員会について紹介がありました。続いて、4つのテーマ（「ポリシー策定の支援」「SCPJ調査」「検証・評価」「研究データに関する取組み」）にわたるその各種取組みが、8名の方より発表されました。

三隅健一氏（帯広畜産大学）は、オープンアクセス方針のひな形を含む、方針策定支援ツール開発につき紹介されました。ツールにはその他に、方針策定までのロードマップ、方針実行において重要なフォローアップの段階でのベストプラクティス等を含むことも検討されているそうです。

松本侑子氏（東京大学）は、オープンサイエンスへの認識や実施状況に関する国内学協会への調査について報告され、学協会による協力を促すため、持続可能な経営モデルや利用可能なツール等の情報提供が必要であると課題を提示されました。

真中孝行氏（筑波大学）は、機関リポジトリ構築済み機関を対象とした、機関リポジトリへの学術論文登載や著作権ポリシー確認に



Photo by : NII

関する調査結果をもとに、SCPJの運営・維持への需要があると報告されました。

林豊氏（九州大学）は、国内オープンアクセス実施率の検証結果とともに、モニタリングの環境が未整備であることを示され、助成情報・OAのステータスを含むメタデータの整備とモニタリングシステムの構築という今後の課題を挙げられました。

西園由依氏（鹿児島大学）は、現在開発が進んでいる研究データ管理に関する教材について報告されました。教材は、海外の先行事例を参考に開発されており、日本の現況に合わせ図書館員による理解促進を目的とした基礎的内容が中心となっているそうです。

大園隼彦氏（岡山大学）は、研究データの機関リポジトリ登録に際して利便性を高めるために追加が必要なメタデータ項目として、助成情報や著者の所属情報等を挙げられたほか、相互運用性向上のために検討が必要な課題につき報告されました。

天野絵里子氏（京都大学）は、人文系研究データの保存状況の調査結果から、データの保存が確実には行われていない現状と、今後の保存の必要性を示され、その実現に向けたデータ移行方法についての検討内容を報告されました。

南山泰之氏（国立極地研究所）は、主に研究データ管理に関する国際コミュニティでの

発表実績や海外大学との情報交換につき報告され、日本からの情報発信の弱さを課題として指摘されました。

これらの発表から、オープンサイエンス推進に関する国内の現況や課題、その課題を解決する体制整備の要点につき知ることができ、特に研究データ管理の実務化に向けた取組みが活発であることを実感しました。現場の担当者として、このような取組みの成果であるツールや教材を積極的に活用するほか、日頃からこういった動向に目を向け、背景を理解したうえで日々の業務を行う必要があると感じました。

[ 報告：神戸大学附属図書館 花崎 佳代子 ]

5月26日（木） 13:30-15:00

## リポジトリ推進協会 設立説明会 ～大学とNIIとの連携・協力下のコミュニティ創出に向けて～



Photo by : NII

昨年度より設立準備作業が行われているオープンアクセスリポジトリ推進協会（Japan Consortium for Open Access Repository : JPCOAR）に関し、設立準備会委員の江川和子氏（筑波大学）・森一郎氏（新潟大学）・宇佐美博氏（立教大学）の3氏より、協会の位置づけ、目標および運営等について説明がありました。

JPCOARとは、機関リポジトリを通じた大学の知の発信システムの構築を推進し、その課題解決に取り組むことを目的に大学図書館と国立情報学研究所との連携・協力推進会議の下に本年7月に設立を予定している新しいコミュニティです。国内の大学・研究機関の力を結集して我が国のオープンアクセス並びに

オープンサイエンスに資することを目標とした事業を進めることと併せて、国内のリポジトリシステム基盤として国立情報学研究所とともにJAIRO Cloudの共同運営を担うこととしています。

これらの実現のため、必要な負担を持ち寄って自立的な運営を進めるために会費の徴収を予定しており、JAIRO Cloud参加機関はJPCOARへの加盟が必須となります。

質疑応答では、会場から、機関の構成員数の定義や、会費の見直しは翌年あるか等の具体的な質疑が活発に行われ、関心の高さが伺えました。中でも「JAIRO Cloudを利用していない機関のメリットは何か」という質問への「単独の機関ではなし得ないリポジトリの発展に必要な事業を行うこと」という回答は、コミュニティの力を結集させるといった目的に適ったものであると納得した次第です。JPCOARの始動を実感するとともに、このJPCOARの中でのDRFの役割についても、さらに詰めていくべき時期にきたことを感じました。

[ 報告：鳥取大学附属図書館 尾崎 文代 ]

## NIIリポジトリ戦略 ～国立情報学研究所のリポジトリシステムの現状と今後～

細川聖二氏（国立情報学研究所）からCSI委託事業に始まるこれまでの学術機関リポジトリ構築連携支援事業の概要と、オープンサイエンス推進を目的とする研究データ公開の基盤整備を含むこれからの課題について説明があったのち、田口忠祐氏（国立情報学研究所）からJAIRO Cloudの機能についてわかりやすい紹介がありました。

続いて、JAIRO Cloudへの移行事例として、下城陽介氏（上越教育大学）と伊豆田幸司氏（近畿大学）より事例報告がありました。それぞれ、DSpace及びXooNIpsからの移行と、ソフトウェアは異なるものの、データ移行ツールSCfWを使用しマニュアルどおりに進めて移行を完了し、移行を検討する後続の機関への示唆につながる発表でした。

セッションの最終コマ「機関リポジトリのID連携」では、「機関リポジトリにおけるDOI登録状況」と題し、加川みどり氏（神戸松蔭女子学院大学）から、国内機関のselfDOI登録数の調査について報告がありました。2015年12月現在のデータではあるものの、selfDOIを付与しているIR数45、コンテンツ数44,585件と、数値的にはまだこれからであり、ウェブサービスからのダイレクトリンクや引用の識別子というDOIのメリット発揮のためにも、DOI付与をますます進めていくべ



Photo by : NII

きであると感じました。また、林正治氏（学術資源リポジトリ協議会/一橋大学）の「学術資源リポジトリ協議会におけるJaLC DOI付与の試みについて」という発表では、研究成果（論文）以外の学術資料リポジトリ（科学実験機器資料および教育掛図資料）へのDOI付与事例が報告されました。非文献資料を文献資料と同じように流通させることの重要性は古典籍の電子化について考える際に常々感じることであり、DOIの有効性を改めて考えさせられるものでした。

[ 報告：鳥取大学附属図書館 尾崎 文代 ]



オープンサイエンスや  
オープンアクセスの波は、  
着々と押し寄せているようじゃの

JPCOARも気になりますね！

うむ！  
今後も動向を要チェックじゃ！





## 誰が学術論文の違法コピーを利用しているのか？ Who uses illegal copies of scholarly articles?

前回に引き続きSci-Hub (サイハブ)の話である。4月28日、「[誰が海賊版論文をダウンロードしているのか？誰もが](#)」と題する記事が『サイエンス』誌に発表された。著者の[ジョン・ボハノン](#)は、同誌で2013年、多くのオープンアクセス(OA)誌がともに査読を行っていないことを[暴露](#)して、議論を巻き起こした人である。

この記事が特に興味深いのは、Sci-Hubの創設者、[アレクサンドラ・エルバキヤン](#)から提供されたサーバーのログ・データをもとに、Sci-Hubの利用者像を分析していることである。ボハノンは暗号化されたチャット・システムでエルバキヤンと接触し、2015年9月から2016年2月までの6か月間のデータを公開用に加工したものを譲り受けたとのことで、実際にその[データセット](#)が記事に付随するデータとして無料でダウンロードできる。まさにオープンデータなのだが、複雑な思いがしないでもない。

衝撃的だったのは、Sci-Hubの利用者は発展途上国だけでなく、先進国も含めた世界中に広がっていることである。日本からもかなりのアクセスがある。ちなみにダウンロード数上位5カ国は、イラン、中国、インド、ロシア、そして米国である。米国の中では、ニューヨークやシリコン・バレーといった地域のほか、大学や研究所がある小都市からのダウンロードが多い。たとえばトップ3に入っているミシガン州イースト・ランシングはミシガン州立大学の所在地である。ログの傾向から、同大の特定の研究者がテキスト・マイニングのため、機械的に大量ダウンロードしているのではないかと推測されている。

この記事ではさらに、オンラインでのアンケート調査

を行っており、その[結果](#)が1週間後に発表されている。寄せられた約11,000の回答のうち60%がSci-Hub利用者とのことで、偏りがあるサンプルではあるのだが、「海賊版論文のダウンロードは悪いことだと思うか？」という問いに対して88%が「ノー」と答えている。Sci-Hubを使ったことがない人や51歳以上の高齢者の間でも、悪いと思わない人が約8割である。所属機関が購入しているのにSci-Hubなどで海賊版を入手したことがある人は37%にのぼる。Sci-Hubを利用する主な理由としては、「正規版にアクセスできないから」が51%、「出版社が儲けているのに抗議するため」が23%、「便利だから」が17%となっている。

正規版が入手できるのに、検索やパスワード入力の手間を嫌って、いわゆるワンストップ・ショッピングであるSci-Hubを使う人が多いことをうかがわせる数字だが、それほどでもないという[分析](#)もある。ユトレヒト大学図書館の[ビアンカ・クレイマー](#)によれば、上記ログ・データ中のユトレヒトからのダウンロード2,878件のうち、60%が大学購読誌、15%がOA誌で入手できる論文だったものの、その数は正規ルートでのダウンロード数(年間で何百万にもなるとのこと)に比べてはるかに少ない。従ってSci-Hubは、少なくとも西欧の大規模大学では、既存システムへの脅威にはなっていないとしている。

Sci-Hubはその後もまたドメイン名を変えつつ、いまだ健在である。



### 栗山 正光

首都大学東京学術情報基盤センター教授  
デジタルリポジトリ連合アドバイザー

【Researchmap】<http://researchmap.jp/read0195462>

次号  
予告

[連載] かたつむりとオープンアクセスの日常 (ほか)

※次号は79・80合併号(9月発行予定)となります。

読者アンケートにご協力ください。

[http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf\\_inq.html](http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html)



<http://www.facebook.com/DigitalRepositoryFederation>

月刊DRFでは、みなさまからのお便りをお待ちしております。[gekkandrf@gmail.com](mailto:gekkandrf@gmail.com)

<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf/>

月刊DRF第78号 平成28年7月1日発行 デジタルリポジトリ連合

